

公園をみる・観る

= 15年間に見えてきたもの =

木々に色とりどりの実がたわわに実り、淡水池には多くの冬トリたちがやって来ており、枯れたアシ原は小鳥たちを包み込んで素知らぬ顔で秋風に揺れている。いつに変わらぬ秋の公園風景なのだが今秋は葦の会ができて15周年目、ひとつの節目にあたる。たかだか15年くらいで僣越だとのお叱りを覚悟の上で、15年間を振り返りこの間に何を見、何を学んできたのか自分に問うて見る。



公園は歩くたびに違う顔を見せてくれることに気がつく。春夏秋冬は言うまでもなく、一ヶ月違いでも、いや一日違いでも公園は同じ表情をしていない。植物も動物も公園の自然の中でそれぞれ生き場を定め、あるべき場所、いるべき場所に収まって生活している。その場所が昨日と同じとは限らないのだ。ある夏の日、ピオトープの水中に小さな黄色い花が咲いた。水中で可憐に上品に揺れるその花の名前が「タヌキ藻の一種」と聞いて花の持つ雰囲気と名前とのギャップに苦笑した（ある意味タヌキに失礼）。またある夏は、クレークがアゾラ・クリスタータという、外国の映画女優を連想させるようなシダ植物（オオアカウキクサ）に占領され真っ赤に染まってしまい仰天したが、何れもいつの間にか姿を消した。観察公園はよ〜く観て歩くと実に面白い。何故ここにタヌキ藻なのか、アゾラ・クリスタータなのか……何気ない風景から自然の様子を読み解くことが出来るような気がした。そして、あらゆる生き物たちの誕生と死に価値があり、その命の存在に感動があるという思いを確認する日々だった。きらら浜自然観察公園、この小さなピオトープにある自然は人工的に整備されたものだが、公園を利用する生き物たちは当然のように公園の四季の移ろい、自然の掟に左右され、当然のように食物連鎖の輪に支配されている。公園内の生き物たちも、他所で生活する生き物と同様に自給自足、弱肉強食の世界に身を置いている。自分の食べ物は自分で見つけなくてはならないし、自分より強い生き物からは、わが身を守らなくてはならない。サバンナで草食動物を襲う肉食動物の映像のような派手な場面はないものの、園路を歩くと、あたり一面捕食された後のトリの羽が散らばっていたり、クモの巣網に体をグルグル巻きにされたトンボらしきものの骸や、食い残された甲虫の硬い頭部など、自然の残酷さを想像させる場面との遭遇に事欠かない。しかし、その残酷さが生き物を育み、種の繁栄を保障してくれる神の御知恵なのだということが推察できる。食物連鎖・弱肉強食の現実に、何とか生き延びようと知恵を絞る生き物たちの健気なさに憐憫と尊敬の念を禁じえない15年でもあった。（土×土）

Kさんの、あんなとりこんなとり

毎年この時期になるとやってくる鳥。ささやき声でヒンヒンヒン、続いて大きくカチカチカチと鳴くのですぐに気が付きます。声の主はジョウビタキのタキちゃんです。寿命が4〜5年といわれているので、同じトリかどうかわかりませんが、家の庭に来るジョウビタキはわが家では皆「タキちゃん」なのです。

オスもメスも翼の上部に白い紋が付いているのが特徴ですが、特にオスはお腹と尾が鮮やかなオレンジ色で、紋もくっきりしています。人懐っこく、愛らしい姿をしていますが、よく見ると黒い顔がわりりしく銀色のヘルメットをかぶったような頭が意外にカッコいいイケメン鳥です。

